小学生と大学生の異年齢交流が子供の社会性に与える影響
－子供教室における実践的検討－

研究代表者　上原　美子　　所属・職位　共通教育科・教授

［要約］
子供教室に参加する子供の社会性の実態と変化への期待の調査（研究1）及び大学生との交流を通した実践的検討（研究2）を行った。研究1ではコーディネーターは、大学生が交流することで人との関わり方を示し、子供たちが社会性を獲得できることや、将来像を描くことができることを期待していた。研究2では、小学生と大学生とが交流することと異学年の小学生同士の交流促進を目指した活動を立案実施した。従来の学習支援型と見守り型ではない活動の提案である。活動の参加者を対象とした調査結果から子供の社会性に影響を与えることが確認された。また、開発した子供教室活動案は一定の有用性を備えており、今後の放課後子供教室においても活用することができるであろう。

［研究組織］
（学内）黒田真由美（看護学科・助教）　張　平平（看護学科・准教授）
保科寧子　（社会福祉子ども学科・准教授）　望月浩江（看護学科・助教）
森田満理子（社会福祉子ども学科・准教授）
（学外）松本佳子　（日本赤十字看護大学・准教授）　藤枝静暁（埼玉学園大学大学院・教授）

１．研究の背景

放課後子供教室は、すべての小学生を対象に、地域の参画を得て学習や様々な体験・交流活動、スポーツ・文化活動等の機会を提供する取り組みであり、小学校教育を補完するものとして子供の放課後を充実させることを目指している[1)]。

子供を取り巻く環境の変化により、少子化および核家族化の進行をはじめ、兄弟姉妹との切磋琢磨の経験の減少、地域における同年代および異世代との交流不足など、環境の変化に伴う子供の失われた育ちの機会については放課後子供教室においても指摘されている[2)]。放課後子供教室では、様々な学年の小学生が参加することから、異年齢・異世代間の交流、および、小学生たちが交流を通じて人とかかわる楽しさを実感し、社会性の獲得へとつながる効果が期待されている。社会性については、かつては、放課後に地域の空き地や公民館などに異年齢の子供たちが自然と集まり、群れて遊んでいた。子供達はそこでの関わり合いやルールのある遊びを通じて、社会性を自然と身につけることができた。

しかし、昭和から平成を経て令和へと時代が移り変わると共に、子供を取り巻く環境が変わった。文部科学省が「3つのない」と指摘しているように、塾、習い事で遊ぶ時間が少なく、町の様子が変わり、空き地や公園など遊ぶ場所が少なく、少子化により遊ぶ仲間が少なくなった。それに伴い、小学生が、かつてのように、同年齢、異年齢を問わず、集団で遊ぶことが減った。また、従来の電子ゲームに加えて、SNS、オンラインゲーム、スマホの普及によって、小学生の遊び内容も変化している。

また、共働き家庭の増加等により生じる「小1の壁」や少子化による家庭内での兄弟姉妹とのかかわりの減少、地域における同年齢や異年齢の子供の交流不足など環境の限界に伴う子供の体験不足がある[3)]ことから、小学生の放課後の過ごし方に着目した。

２．目的

小学生たちの放課後に着目し、子供教室における実践的検討を通して「小学生と大学生の異年齢交流が子供の社会性に与える影響」を明らかにすることが本プロジェクトの目的である。

本プロジェクトは2つの研究で構成し、研究1は、子供教室のコーディネーターを対象としたインタビューを通して、子供教室における小学生の社会性の実態と変化への期待を明らかにする。また、研究2では、子供教室において大学生と異年齢交流を経験した小学生の社会性の変化を分析する。

３．研究1「子供教室コーディネーターからみた子供教室における小学生の社会性の実態と変化への期待について」

【目的】

子供教室において、小学生と密接にかかわっているコーディネーターからみた子供教室における小学生の社会性の実態と変化への期待を明らかにし、大学生との異年齢交流に向けた基礎資料とする。

【データ収集期間】

2019 年 3 月

【データ収集方法】

研究協力者は、3 校の子供教室コーディネーター5 名である。年齢は 40 代～80 代で、コーディネーター歴は平均 7.6 年（3～14 年）だった。

研究協力者に対し、半構造化面接法によるインタビューを実施した。子供教室における小学生が獲得している社会性と未獲得で獲得してほしい社会性、小学生が社会性を身につけるために大学生が子供教室に参加することへの期待等について、自由に語ってもらった。

インタビュー内容は、同意を得た上で、IC レコーダーに録音するとともに、記録もした。面接時間は平均 52 分（47～62 分）であった。

研究1を実施するにあたり、研究代表者の所属機関の倫理研究委員会の承認を得た(承認番号：第30084号)内容を遵守した。

【分析方法】

面接内容から逐語録を作成し、繰り返し読み込み理解を深めた後、小学生の社会性の実態、大学生が子供教室へ参加することへの期待についてコードを抽出した。抽出したコードの類似性と差異性を比較し、類似した意味を持つものを、子供教室における小学生の社会性の実態についてのカテゴリー、子供教室における小学生の変化をもたらす要因についてのカテゴリー、小学生の社会性の変化についてのカテゴリー、コーディネーターの意図的な小学生への関わりについてのカテゴリー、大学生との交流への期待についてのカテゴリーとして抽出した。その後、カテゴリー間の関連性を検討し、構造化した。

研究過程の全過程を通じて、複数の研究者間で読み込み、分析結果の検討を繰り返し行った。

【結果】

コーディネーターからみた子供教室における小学生の社会性の実態と変化への期待を図1に示す。

コーディネーターは、大学生が子供教室に参加し交流することで小学生に人との関わり方を示し教えてほしいと、小学生が社会性を獲得できることや、小学生が将来像を描くことができることを期待していた。また、大学生にとっても大学生が小学生や社会を理解する機会になると感じ、コーディネーター自身にとっても大学生との関わりは運営側にもパワーをもらえると、小学生、大学生、コーディネーターそれぞれの相互作用が期待できると捉えていた。

【考察】

コーディネーターは子供教室において様々な葛藤や悩みを抱えながらも小学生同士の集団活動の中でいかにその社会性を育むかに、日々、悪戦苦闘しながら取り組んでいることが明らかになった。

大学生との交流に関しても、その交流への期待が具体的に語られ、今後、大学生との交流の場を創り出すことが、小学生の社会性の変化へとつながる可能性とその意義が示唆された。

４．研究2「子供教室において大学生と異年齢交流を経験した小学生の社会性の変化について」

【目的】

A市で開催している子供教室において、小学生が異年齢交流として大学生と交流する介入をすることで、

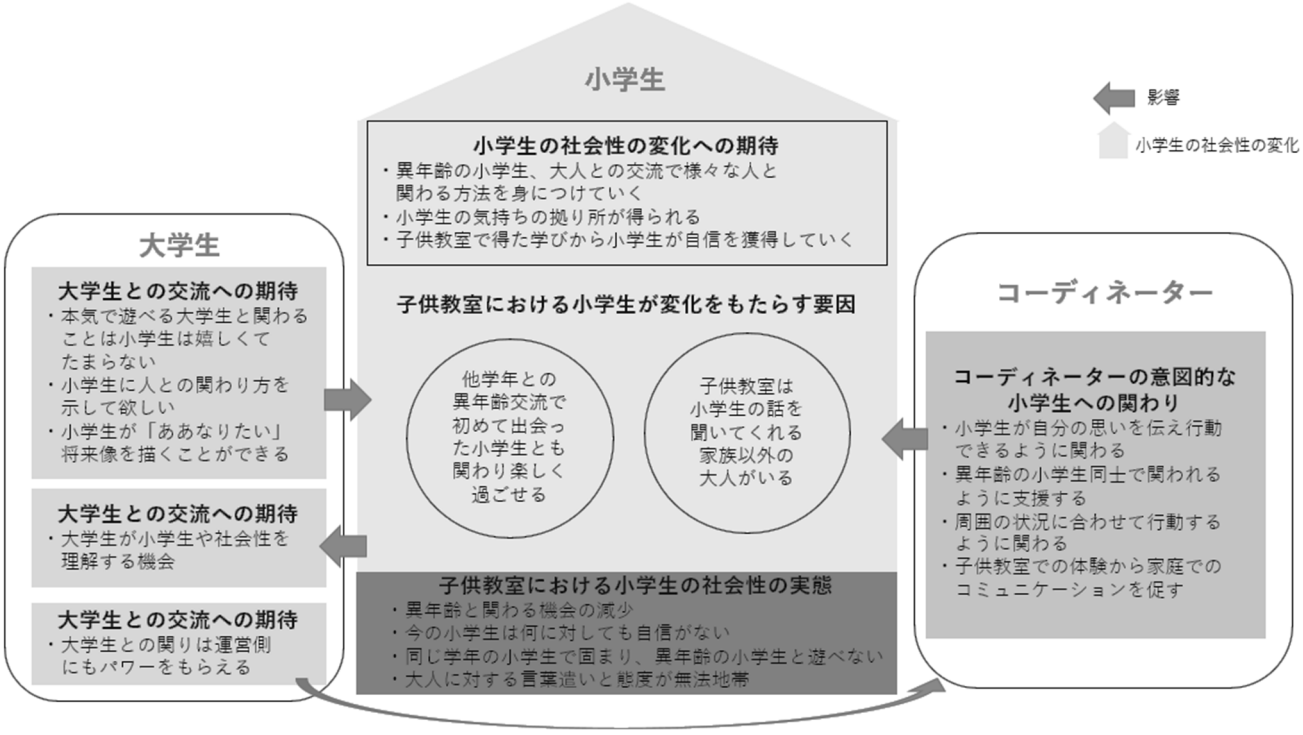

図1　子供教室コーディネーターからみた子供教室における小学生の社会性の実態と変化への期待

社会性に関わるスキルにどのような変化をもたらすかについて明らかにする。

【データ収集期間】

2019年10月～2020年1月

【データ収集方法】

小学生と大学生との交流と同時に、異学年の小学生同士の交流促進を目指し、D小学校の放課後子供教室で、保健医療福祉系大学で学ぶ大学生（以下、大学生）が参加する企画を実施した。1回目は2019年11月2日、2回目は12月7日に実施した。介入内容と方法は、参加者数と年齢の内訳を考慮し、活動は表1に示す内容で実施した。

表1　活動の特性とねらい（抜粋）

「ブンブン独楽」 「ストロー飛行機」	描いたり色付けしたり作ったもので遊んだりする。短い時間であるが、小グループで互いの様子を感じながらじっくりと作ることができる。作ったもので遊ぶ際にはコツを伴うので、それぞれコツをつかむ必要がある面白さがあるとともに、他の小学生の様子に関心をもったり、教えあったりする状況が生まれることを想定する。遊ぶ場面で、大学生が小学生に教えたり励ましたりするような介入をすることができれば、大学生と小学生との交流だけではなく、それが小学生相互の交流につながると考える。
「なべなべそこぬけ」 「はないちもんめ」	実際にふれあったり、言葉の掛け合いや歌でリズムを共有したり、動きを協調させながら遊ぶことができる。競う要素も取り入れることで、小学生に満足のいく遊びになる。大学生が介入することで、年齢や体格の異なる大勢でも、特に、体の小さな小学生が動きやすいように調節することができる。
「リスの引越」	簡単なルールの鬼遊びである。相手を見つけて2人組になって木を作る、リスは木の家に入る。リスや木が場所を移動するごとに、近くの人とペアになったり、知らない小学生のいるところにでも入って行ったりして、いろいろな小学生同士が顔を合わせてふれあう状況が生まれる遊びである。大勢の中では、ルールを理解しにくかったり、顔見知りではない人の輪の中に自分から入りにくい小学生がいたとしても、大学生にサポートされて、安心感をもつことができると期待したい。
「サイコロトーキング」	小グループで落ち着いて言葉を交わすことができる。サイコロの目に従って質問が決まる面白さ、全員に順番が回り、それぞれが声を出し、耳を傾けることができる。
「ペーパータワー」	小グループで協力するひとときをもつことができる。紙の加工の仕方に応じて組み方も考えなくてはならない。メンバーは互いに、その年齢なりに、目の前の取り組み状況をとらえて、自分が何をどうすればよいかを考えて、自分も加工したり積んだりして役を担える。

研究協力者は、D小学校子供教室に参加している児童のうち、小学校を通じて、企画する子供教室に2回とも参加できると答えた児童30名である。そのほか、子供教室を担当するコーディネーター1名と大学生10名である。

一事例実験（A-B-A）デザインにより、大学生の参加する子供教室開始時と終了後の前後評価から、小学生の社会性の変化を調査した。

小学生へは、介入前、1 回目と 2 回目の各介入直後、そして 2 回目の介入から 1 か月後の合計 4 回に、自記式アンケート調査で社会性に関する 15 項目と自己評価の 13 項目（自由記述を含む）を調査した。

コーディネーターへは、1 回目と 2 回目の各介入直後、そして 2 回目終了 1 週間後の交流会後に計 3 回ヒアリングし、小学生の社会性に関する様子を聞き取りした。また大学生へは、1 回目と 2 回目の各介入直後に 5 名ずつに分かれてのグループインタビューを実施し、小学生の社会性に関する様子を聞き取りした。

コーディネーターのインタビュー時間は平均46分（最小27分、最大73分）だった。大学生のグループインタビュー時間は、1回目が平均49分、2回目が平均66分だった。

研究2を実施するにあたり、研究代表者の所属機関の倫理研究委員会の承認を得た（承認番号：第19039号）内容を遵守した。

【分析方法】

小学生の自記式アンケート調査は、第1回～第4回の参加者が各回で異なることから、単純記述統計と自由記述の分析を行った。

コーディネーターのインタビューデータは、小学生の社会性に関して語られている部分を抜き出し、オープンコード化した。その後、関連性を検討し、意味のまとまり毎にカテゴリーを見出し、さらに上位カテゴリーに整理した。

大学生のグループインタビューデータは、インタビュー内容から1つの意味内容毎に1つのセグメントを抜き出して289のセグメントを得た。セグメントの意味を忠実に抽出してオープンコード化し、意味のまとまり毎にカテゴリーを見出し、さらに上位カテゴリーに整理した。

この分析過程においては、複数の研究者でデータを読み込んでカテゴリー分けを検討した。

【結果】

小学生へのアンケート結果では、グループ内で協力したり会話したりする様子から新しい友達や大学生とふれあえたことへの満足感、意欲が読み取れた。

表2　大学生のインタビュー内容の分析

観点	上位カテゴリー	カテゴリー数	オープンコード数	セグメント数	
異学年の小学生同士がかかわろうとする様子	かかわりの開始に至らない	2	6	11	101
	挨拶・感謝・必要なことを言葉で伝えない	1	2	2	
	活動によるふれあいを心地よく感じる	3	9	12	
	積極的にかかわる	6	34	76	
小学生が大学生とかかわろうとする様子	良好な関係構築の開始に至らない	5	8	11	96
	挨拶や感謝、援助の要請を言葉にしない	2	4	9	
	活動やふれあいの楽しさを体験して、次第に自分から	5	11	18	
	大学生とのかかわりに期待をもってかかわる	5	16	28	
	大学生への信頼感をもって積極的にかかわり行動する	4	14	30	
小学生が活動に取り組む様子	自由な気持ちで過ごす	1	1	4	46
	活動意欲に乏しい	1	5	7	
	遊びの楽しさを知る	4	5	15	
	意欲的に遊ぶ	5	10	20	
大学生による小学生の意図的介入	大学生とのかかわり及び小学生同士のかかわりを促す	3	12	15	46
	小学生の活動意欲を高める	2	5	8	
	共感的理解に基づいてかかわる	1	7	7	
	対話的にかかわる	5	15	16	

コーディネーターインタビューでは、今までの子供教室での小学生の様子と異なると感じた点は、活動に積極的に参加したり、楽しさを表現したり、他の参加した小学生と交流したりする様子、年長者がリーダーとしてふるまう様子、状況を判断して行動していたこと、小学生と年齢の近い大人が複数回、小学生にリーダーとして関わるなかで大学生の尊敬できる態度を学んだことがあげられた。

大学生のグループインタビュー結果のカテゴリーを表2に示した。4つの観点として、異学年の小学生同士がかかわろうとする様子、小学生が大学生とかかわろうとする様子、小学生が活動に取り組む様子、大学生による意図的介入が抽出された。

【考察】

本研究では、従来の学習支援型と見守り型ではない、大学生と子供が交流するという型を立案、実行し、その成果を、小学生の自記式アンケート調査から明らかにすることができた。この点では、従来の先行研究には見られなかった新たな知見を得ることができたと言える。

コーディネーターは、小学生の子供たちと年齢の近い大学生に子供たちが親しみを持ったこと、大学生の教室での振る舞いに尊敬の念が生まれたことにより、良きモデルとなったと考えている。社会性の変化を感じた項目として普段の年配の教室運営者たちとの関わりとは異なった様子を見せた小学生の姿について話しており、子供たちの積極性やコミュニケーション力、状況判断力、リーダーシップなどといったポジティブな変化を指摘している。若いロールモデルの存在が子供たちに強く前向きな影響を与えたことが示された。

大学生との活動開始当初から、多くの子供が大学生との活動やかかわりに期待を抱き、活動を通してさらに意欲を増す姿が捉えられた。異学年の子供同士のかかわりについてもグループ活動の中で意欲を増す様子が捉えられた。小グループで固定して2日間活動したことが関わりやすい環境として働いたと言える。終了時、子供同士や大学生に対して心のこもった挨拶をする様子からは、活動やかかわることへの意欲を高め、大学生に対しては信頼感を増したことも読み取れる。大学生が子供の主体性を尊重して対話的にかかわりを心がけたことも明らかになり、活動やかかわりの促進の大きな要因である。猿渡[4)]、請川[5)]らの報告でも指摘されているように、放課後子供教室が、小学生の楽しめる場所であり、安心感や異年齢交流を促進させることを本研究でも改めて確認することができたと言える。

５．結論

本研究では、大学生と小学生が交流するという型を立案、実行し、その成果を小学生の自記式アンケート調査や、コーディネーター及び大学生のインタビュー調査から明らかにした。放課後子供教室において、小学生と大学生が交流することは、他児との交流、他児への援助、活動享受、嫌な出来事の消失、既に身につけている社会性の維持において有効であることが示唆された。さらに、本研究で取り組んだ『子供教室活動案』は、一定の有用性を備えており、今後の放課後子供教室においても活用することができるであろう。

６．到達度

小学生の社会性の発達を目指した異年齢交流による介入プログラム案のパイロットスタディとして評価はできたが、新型コロナウイルス感染症の蔓延による影響から、2年間の研究期間中に、本格的な介入研究までは着手できなかった。地域に出向いてのフィールド研究ができる目途が立たない状況のため、本研究は中断とした。

７．引用文献

1) 文部科学省,厚生労働省. 新・放課後子ども総合プランについて（通知）. (2018.9.14)
2) 金藤ふゆ子. 放課後子ども教室におけるプログラム開発のために. 文部科学省（2010.2）
3) 再掲2)
4) 猿渡智衛. 地域における子どもの放課後の居場所づくりに関する基礎調査Ⅰ ―神奈川県における全県調査結果をもとに―. 弘前大学大学院地域社会研究科年報（2017）；13：93-112,
5) 請川滋大. 子どもの居場所としての「放課後子ども教室」－その現状と課題－. 日本女子大学紀要家政学部（2010）；57：23-33,

８．研究発表

（１）公表した又は公表予定の論文

①森田満理子，保科寧子，藤枝静暁，上原美子，黒田真由美，松本佳子，張平平，望月浩江. 放課後子供教室における異学年間の交流促進を目的とした実践報告 - 教員と大学生の共同による準備と当日の展開－. 子ども・教職研究 (2020)；3：53-67

②保健医療福祉科学（投稿予定）

（２）公表した又は公表予定の学会発表

未定

９．本研究と関係する獲得した外部資金

なし

１０．今後の研究の発展と展開（社会への還元）

報告書をC市教育委員会及びC市内子供教室、埼玉県教育委員会及び市町村教育委員会関係部署への配布啓発。

＊本報告書は、表記を「子供」で統一した。